

研究経過報告

石田 勢津子

I 自己学習システムに関する研究

1984年度は、「自己学習システムのメカニズムに関する研究」と題した課題で、科学研究費を受け、2つの実験を実施することができた。これは、自己評価、自己強化を含む自己学習システムを教授—学習場面に、いかに有効に機能させるかについての一連の研究の一つである。マイコン制御の実験で、その装置の作製にかなりの時間を費したが、現在、実験結果の整理も終え、論文としてまとめているところである。

また、外的達成規準についての情報が自己評価にどのような影響を与えるか、自己学習システムにかかわる諸々の要因をとり上げた実験を行った。その結果は、本年度の紀要に掲載されている。

II 共同研究

梶田助教授、大学院の伊藤篤氏とともに、「個人レベ

ルの学習・指導論 (Personal Learning and Teaching Theory)」に関する研究を、昨年度から引き続き行っている。

本年度は、愛知県教育センターの教科研究部との共同研究のかたちで、県下の教諭を対象として、「個人レベルの指導論 (PTT)」の調査を行った。小学校、中学校の教師たちのもつ指導に対する個人的な信念はどのようなものであるのか、その結果については、本年度の紀要に掲載されている。

また、これと同時にいくつかの調査も実施し、現在、その結果の整理に追われている。できるだけ早い時期に論文としてまとめていきたい。

最後に、この略して「PLATT」と呼ぶ一連の研究は、今後も、梶田助教授を中心に、教育への実用性という視点から、研究を押し進めていく予定である。

研究経過報告 (1983年秋から1985年夏まで)

池田 博和

1. 青年期の病理と心理臨床

①1984年7月に村上英治先生は御還暦をむかえられたが、このお祝いの日にあわせて、「生きること・かかわること」と題する記念論文集を編集、刊行することができた。この中では特定の症状選択のできない青年期危機の症例をとりあげ、そのケース、およびその家族とのかかわりについて述べた。この論文では心理臨床家と相手とのかかわりに重点がおかれ、必ずしも次の点は強調されはしなかったけれども、ここでの文脈からすれば、こうした明確な症状が取れないケースこそが、「生成の停滞」という青年期危機症候群の本質的病態を露呈する中核群に他ならないのではないかということ、および精神分裂病との連続性の問題が重要な視点になっている。

②昨年度の本紀要には、刈谷病院の服部孝子と共同で「ある精神分裂病者の心理療法過程」と題する論文を執筆した。ここではあるひとりの分裂病者の心理療法過程に即して、精神分裂病者の基本的存在様式の問題と心理療法論についての考察を行なったが、分裂病の基本的な

ありようを「人間学的均衡」の視点から分析することは、私の中ではすでに自明の事柄になってはいたものの、これまで正面切ってこれを発表する場はあまりなかったため、貴重な機会となった。この視点自体は先人の業績によるところが多く、まったく新しい知見とはいえないけれども、これを心理療法論に直結させたところに意味があると思う。とりわけ何人かの経験深い臨床家や精神科医から、この点についてはかなり高い評価が得られたことは、望外の喜びとするところであった。

③この他、まる5年にわたって取り組んできた重篤な青春期痩せ症のケースや、まる7年になる離人症を主とする青年期危機のケースは、臨床的にようやく終結への見通しが立ちそうな気配になってきているし、学生相談として担当している典型的な Student Apathy のケースもいよいよ展開期を迎えつつある。こうした臨床経験をとおして、そろそろ青年期危機症候群の病理と心理療法についての体系化をしていかななくてはならないと感じているところである。

2. 女性性の内的受容

この問題については、やはり昨年度の本紀要に院生の森田美弥子、粟田順子とともに「序報、女子短大生の場合」として報告した。これはまさしく緒についたばかりであって、まだまだ研究方法も主題の方向性も摸索が重ねられなくてはならないが、その後十分な具体的展開はなされてはいない。現在は資料としての女学生の手記が収集されている段階である。

3. 心理学の方法論

これは以前から関心をもっていたテーマであり、講義で「方法としての事例研究」を論じたり、昨年度から梶田正巳先生と「心理学研究法」を担当するようになってからさらに、その問題を深めたものとして自らのうちに定着させねばならないと感じてきたが、昨年の人間性心理学会では「人間理解の方法としての現象学」と題するシンポジウムを企画し、また指定討論者として参加することができて、一步この歩みを前進させることになりえたと感じている。そうはいつでも、実はこのシンポジウムの記録をその後、公刊することにしたのであるが、あらためてこれを文章化しようとする、なかなか筆がす

まないものであり、目下はこの問題と格闘中である。

4. 精神衛生

① この文脈では、本学部の附属中・高等学校紀要第30集に「学校精神衛生活動の展開にむけて——ある登校拒否事例との取り組みから——」という小論文を載せた。
② ライフ・サイクルとの関連で精神衛生の問題を論ずること、つまり、正常と異常の弁証法ともいうべき視点からエイジングのプロセス、および日常生活と生の意味を問いかえし、深化させるという作業への方向性については、すでに2年前のこの欄でものべたところであるが、最近、この構想は相当まとまってきている段階にあるといつてよい。

5. その他

毎年前期に「演習・投映法」を担当している時にいつも思うことであるが、前々から懸案になっている教科書「ロールシャッハ法解説——名古屋大学式技法——」改定版の公刊を行う必要がある。いよいよ研究会なども組織し、本腰を入れて積極的に取り組んでいかなければならない時期がきていると感じている。

研究について思うこと

梶 田 正 巳

振り返ってみると、いつの間にか20余年にわたって教育心理学とつきあって、暮らしてきている。その間になした仕事が本当の意味で“教育心理学の研究”という名に価するか否かはさておき、自身の体験を通して、教育心理学の“研究”というものについて、実に考えさせられることが多かった。率直にそういう感じがする訳である。この欄では普通は、過去一年間の研究業績について語るのが習わしになっている。しかし、今回はその習慣を離れて、教育心理学の研究について最近考えることを少し思いつくままに書き表してみたい。

ここ数年来のことであるが、しばしば頭の中に浮かぶ二つの言葉がある。それは、“実学”と“虚学”という言葉である。福沢諭吉の「学問のすすめ」にも強調されているように、実学という概念は確実に存在する。しかし、後者の虚学なる言葉があるかどうかはよく知らない。おそらくないのではないだろう。歴史的にいつても、実学はそれ自体チャンとした意味内容を持っているのである。しかし、筆者は、それはともあれ、現実（リアリティー）と直接の関係を有している学問という意味を実学の

中に込めたいと思う。虚学は、それとは全く対照的である。リアリティーとは何のかかわりも有しない研究は、この虚学の中に入るだろう。つまり、学者の頭の中だけの、あるいは机上だけの観念的な学問は、虚学になるように思う。そこでは、学者のサークルの中だけで通用するようなジャーゴンによって通常は研究が語られている。もちろん、そうした研究が意味がないとか、あってはならないとまで極論するつもりはない。

かつて筆者がかかわってきた移行学習というような研究領域は、明らかに後者の虚学に入りそうだ。この領域では、一般はいうまでもなく、それを専門としない心理学者にも理解しがたい複雑な概念が構築されている。そして、こうしたジャーゴンを使わないと研究者同士がコミュニケーションすることもできない。それだけならまだしも、概念で武装された理論や仮説が、理屈が複雑なわりには余りにも当たり前すぎるのである。一般的にいつても、心理学の研究にはこのような特徴がありそうである。ともあれ、確かに概念の構築は研究には必要なのだが、それが研究者の学問的な立場の自己防衛に過ぎないので